
School Frends

まるぼー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

School Friends

【ZPDF】

Z0608A

【作者名】

まるぼー

【あらすじ】

母を事故で失った主人公その悲しみをのりこえて多くの友達や恋人と、出会う感動恋愛ストーリー

第1話・出発（前書き）

初めて投稿するんでうまく、書けたかわからないけど頑張って書きました

第1話・出会い

チユン！チユン！

秋

「はあ～。よく寝た。」

俺は、大きなあぐびをしてベッドからおりた。
そして、机においてある写真にあいさつをした。秋

「おはよう。母さん。」

写真にうつっているのは4年前に事故で死んだ母さんだ。
着替えを終えて朝食をとりに下に降りた。

秋

「おはようございます。父さん。」

俺の父さんは、一代で莫大な財を築き上げた、法条グループ社長だ。
だけど、いつも仕事で家にいなかつた父さんを俺は、あまり好きで
はない。

秋

「こんな時間にいるなんて珍しいですね。」

父

「ああ。まったくだ。秘書のスケジュールミスで貴重な時間を無駄
にした。」

秋（朝から顔を合わせたと思ったら、この男は）父
「今日から、お前もあたらしい学校だつたな。」

秋

「ええ」

父

勉強やスボリツにおいて誰にも負けではないぞ！」

秋（またその話かよ。もううんせりだ。）

「分かってます。それじゃ、行つてきます。」

「坊ちゃん、お車でお送りしましょつか?」鞄をもって玄関をでた。

だらりかひや。」

「それならどうぞお手を貸して。」

「ハズ。あつがハズ。二ハハズ。」

そして、高校へ歩いて向かつた。

-2-A 教室-

「なあ、確かに今日は。転校生くんの。」

「ああ。吉川はそういってたけど」

「どんなやつがくんだ?」

「女がいいよな」

「男だつたらどうする
「ヤキいれてやるか」

『ハハハハ・・・・』 吉
「よーし皆席つけ。転校生を紹介するが。」

「男・女?」

吉
「男だ。」

「なうんだ。つまんねーの。」

吉

「せうゆうひ」と囁つた。じゃあ入つてき。」

ガラガラ

吉

「転校生の・・・」

秋

「法条秋俊です。よろしく。」

「けつこうよくない。」

「うんうん」

吉

「法条は、私立紫電高校からきた。仲よくしてやつてくれ。」

ダツ！ダツ！ダツ！ガラガラ

浩

「ふう〜。間に合つた。あれ・・・・」

吉

「浩人また遅刻か！たぐ、今日は許してやるから早く席につけ。」

浩

「珍しい。」

吉

「じゃあ秋俊の席は・・・・・」

女

「先生！」「空いてるよ」

吉

「そこは休んでるだけだろ。え～と、あつ浩人」

浩

「えつ！」

吉

「お前の隣空いてるだろ。」

浩

「ええ。」

吉

「じゃあ、秋俊君あの席について。」

秋

「はい」

ガタ

吉

「じゃあHRは以上。1時間めの準備しつか」
女・男『ねえねえ、なあなあ、今ビリヒ住んでるの、前の学校どう
だつた?』秋
「ええ~と」

浩

「よ。秋俊、1時間め体育だから俺が案内してやるよ。」

秋

「うふ。あつがとつ。」

浩

「よし。行け!」

浩
「まつたぐ、あいつら迷惑つてこいつ言葉知らねえのか。」

秋

「ありがとう。けつこつ困つてたんだ。」

浩

「たぐつ。いやんと言わねえとだめだぞ。」

秋
「うふ。だけじ断るのこがてで。」

浩

「はあ~。あつ、自己紹介まだだつたな。俺は九条浩人よろしく。」

秋

「僕は法条秋俊よろしく。」

浩 「法条つてまさかあの法条グループの?」

秋 「うん。父ちゃんがやつてゐから、別に僕には関係ないけどね。」

浩

「ふう〜ん。やべ、早くいかねーと始まっちゃう。」

秋

「急いで。」

浩

「やつちじやなくして、こつちだ。」

秋

「でも矢印で書いてあるよ。」

浩

「あつそつだつた。」

秋

「頼むよ〜。」

浩

「わりいわりい。急げ。」

秋

「うん。」

- 体育館 -

「よし。じゃあ今日は、男子がバスケ、女子がバレーをやるで。それぞれ分かれてチーム作つて始める。」

浩

「秋俊。一緒にやるひつば。」

秋

「うん。」

「ジャンパー前へ」

ピッ！

ダンダンダンダンダン

浩

「秋俊いけー」

ヒュッ！

秋

「決める。」

「させるか」

バッ！

（なに、かわした。）

ダン！

「ダブルクラッチして、ダンクだと！」

秋

「ふうー。まあまあかな。」

浩
「ナースイス秋俊。」

秋
「そんなことないよ。よ~しあつ一本。」

ダンダンダン!

「バスだ!」

ヒュツ!

浩

「甘よ!」

パシッ!

「クソ!」

浩

「秋俊!! もう一本いけーーー!!」

ヒュツ!

ダンダンダン! キュツキュツ!!

「ゴー! 前固める

スツ! シュツ!!

「何ー!」

パサツ!!

(スリー・ポイントだと!) 秋

「やつたーーー! 入った。3点ゲット。」

浩

「ナイツ シュウ秋俊！…お前どこからつっても入るな。」

秋

「けつこうバスケは得意だからね。」

・・・・・…ピッピー…!

「そこまで。90対8でBの勝ち。」

『ありがとうございました。』

体育が終わって教室に戻る途中、先生に呼び止められた。
なんだらうつ思つて話を聞いた。

「お前のバスケの実力はすごい。どうだ、バスケ部に入らないか？」

秋

「すみません。僕部活に入るつもりはないんで。」

「そうか。まあ、一応考えておいてくれ。」先生はそういつと、体育教官室へと入つていった。

・教室

二時間め・・・3時間め・・・4時間め・・・キンコーンカーンコン
4時間めの終わるチャイムと同時に、ほとんどの生徒が教室から出
ていった。

浩

「あ～あ。終わつたか。」

秋

「よく眠れたか？」

浩

「ああ。さて飯にするか。どこで食つ。」

秋

「天気もいいし、屋上で食べようよ。」

浩

「んじゅ。」
「行こう。」

俺は、浩人と一緒に屋上へと向かった。

た。

俺と浩人はベンチに座って昼食を食べ始めた。

「おっ、秋俊の弁護つまんうじやん。ひとつくれよ。」

「おいおい。自分のがあるだろ、しかたないなあひとつだけだぞ。」

浩

ペーパー。」
「へへへ」
「ナシ」
「」

浩

秋

「全部俺が作つたんだ。」

浩

「へー。お前料理もできるんだ。」

そう言いながら浩人の箸がまた、俺の弁当へとのびる。

秋
「おいおい。ひとつだけだつていつたる。」

浩

「いやー。わりいわりい。あんまりうまいもんでつい。」

2人で談笑しながら食べていると、突然・・・

明
「あなた達、なにしてるの。」

男1

「あー。なんだてめえは。関係ねーだろ。」

明

「校内でタバコを吸うなんて、私が許しません。」

と、言い争いが聞こえてきた。

なにかと思って顔を向けると、そこには、一人の女子生徒と、二人の男子生徒がいた。

男1

「別に、吸つたってかまわねえだろ。」

男2

「あんまりうるせーと、犯すぞい。」

明

「そつそんなことで、私はひきません。先生達に言いますよ。このこと。」

男1

「何だと、このアマ。」

男2

「女だからって容赦しねえぞ。」

2人の男子生徒が女子生徒に、殴りかかるうとした。
秋

「やべ～」

タツタツタツタツ。

ヒュツ！ガシ！

すんでのところで、男の腕を掴むことができた。秋
「お前ら女一人に対して、一人がかりはないだろ。」

男1

「なんだてめえは。関係ねえ奴はひつこんでろ。」

男（何だこいつ、ふりほどこうにもすげえ力だ）秋
「確かに関係ないけどさ。女の子助けるのは、男の役目だろ。」

男2

「何いってやがんだ、この野郎。」

男子生徒が、俺に殴りかかってきた。ヒュツ！
俺は、すんなりかわすと足をかけて相手を転ばした。スツ！ドテン！

男2

「よくもやりやがったなてめえ～。」

浩

「もうその辺にしどけよ。そうしねえと、俺が相手になるぜ。」バ

キ！…ベキ！…ゴキ！男1

「くつ！覚えてろよてめえら。」

そう言いながらさつせと一人は屋上から消えていった。

秋 「君、大丈夫。けがとかなかつた？」

明 「うん。ありがとう。助けてくれて。」

浩 「なうに。たいしたことしてないから。」

秋 「本当に大丈夫。」

明 「うん。」

浩 「つておこいらへ。俺をシカトするな。」

明 「ふふふ。そう言えば、自己紹介まだでしたね。私は、四法院
この学院の生徒会長をしています。」

明
あきひ

浩 「俺、九条浩人一年B組。でこつちが・・・・・」

秋 「法条秋俊。同じく一年B組よろしく。」

「法条秋俊。同じく一年B組よろしく。」

「いやいやよしへ。秋俊君に、ええと……なんだっけ。」

浩

明

キン「ーンカーンコーン！明
「あー！チャイムだ。早く教室にもどる。」

「うん。」

浩

教室

5 時間め数学の授業

「誰か、この問題解けるやつ。何だ、誰もいないのか。じゃあ。そのお前。」

「えへと、あれがこうなつて、あへだから。うへん、わかりません。

「前の授業聞いてればできる問題だぞ。高2にもなつて、分かりま先

せんは、ないだろ？』のバカ。』

生

「すみません。』

先

「しばらぐ、たつてゐ。じやあ、つきは、秋俊やつてみる。』

秋

「はい。』

黒板の前にやつてきて、スラスラスラスラ！
解くのに約1分かかった。

秋

「つと、これでいいですか。』

先

「かつ完璧だ。』

秋

「あつ、ちなみにここのをこうすれば、もつと早く解けますよ。』

そういうて、黒板に書いた問題の一部を指差した。

先

「そつそつなのか？』

秋

「ええ。大学のレポートで見ましたから。』

先（まつ負けた。私が、自称数学博士の私が、生徒に。）

「きつ今日の、じつ授業はここまでにする。あつあとは、各自で自

習してください。」

ガラガラピシャツ！

ワイワイ。ガヤガヤ。

キンコーンカーンコーン！六時間めも終わり、帰りのS · H · Rも終
わって帰ろうとしたとき、後ろから声をかけられた。

浩

「秋俊。一緒に帰ろうぜ。」

秋

「いいよ。どこかよってくか？」

浩

「いいね。カラオケ、ゲーセン。」

秋

「カラオケにするか。」

女

「ねえ私たちも、いつていい。」

そういって、2、3人の女子が声をかけてきた。秋
「うん。いいよ。」

そして駅前のカラオケボックスにはいった。浩

「時間どうする？」

女1

「3時間ぐらいでいいんじゃない。」

女2

「うん。 それぐらいでいいよ。」

秋

「じゃあ、3時間で」

店

「3時間で1980円になります。」

秋

「いいは、俺が払つておくよ。」

女

「ありがとう。秋俊君」

「俺は、サイフから2000円をだすと店員に渡した。秋

「あつ、おつりはいいです。」

女1

- ポップス -

「最初誰歌つ?」

女2

「うーん。どうしようか」

浩

「じゃあ、いいは、白狼学院のポップスの、キング（自称）がいく
か。」

「そつぱうと浩人はマイクをもつて、歌い出した。」

（・・・・・）

浩

（・・・・・）

（・・・・・）

「低く……」

秋
「じゃあ、次は俺が
女1（秋俊君、何歌うんだる楽しみ）
浩
「何歌うんだ。」

秋
「うん。陽炎の『君に会いたい』」

浩
「おいおい。一番難しい歌だぞ。」

女2
「…...99点

浩
「秋俊君、す」「
「まつまあまあじゃないか。」浩
「負けてたまるか。」

秋

「おいおい。女の子にも歌わせてやれよ。」

その後も、みちつり3時間歌いまくつた。
駅でみんなと別れて、家についたのは、7時を少しずぎてからだつた。

秋
「ただいま。」

要

「お帰りなさいませ。坊ちやん。」

秋

「ただいま、要さん。家でも、秋俊でいっていってるだろ。」

この人は、西紀 要さん。

俺より、ひとつ年上のお姉さんみたいな感じの人だ。

俺と同じ白狼学院に通つてる。

要

「そういう訳にはいきません。学院でも、会つことは少ないじゃないですか。それより、夕食になさいますか、お風呂になさいますか。」

」

秋

「じゃあ、いはんで。」

要

「かしこまりました」

秋

「父さんは帰つてる?」

要

「いえ。まだお帰りになつていません。」

秋

「わづ。」

秋 秋(また仕事かよ。まつたぐ。)

「じゃあ、着替えてくるから、食堂に用意しておくれる。」

要

「かしごまつました。坊ちやま。」

・・・・・夕食を終えて部屋に戻った。

秋

「ふう。寝る前に本でも読むか。」

本棚から一冊本をとりだして読み始めた。・・・秋
「ふあう。寝るとするか。」

電気を消して眠りについた。

・・・・・・・・・次の日ザーザーザーザー俺は、雨音で目が覚め

た秋

「つん。今日は雨か。ついてないな。」

そういうながら、ベッドからおつた。

着替えをすませて、食堂に向かつと父の怒声が聞こえてきた。

父

「バカモノー！…昨日あれほどこつたのに、またミスをしあつて。」

秘

「申し訳ありません」

父

「謝つて済む問題ではない。もつお前などいらん。首だ。」

秘

「そんな。御願いですどつかそれだけは。」

父

「いや。お前は首だ。」

秋

「父ちゃん、別にわざとやった訳じゃないんだから。」

父

「一度も回じマスをするやつは、無能なやつだ、いらん。」

力チン!!!

秋

「父さん! 今の言葉取り消せよ! この世に完璧な人間なんて、いるわけないだろ! 誰にだってミズぐらいいあるだろ。それを、無能なやつなんて言うなよ。」俺は、父さんにくつてかかった。

父

「親の言つ事に、子供が口をだすな!!!」

秋

「親? 親だつて。あんたが俺に、俺に親らしいことしてくれたことがあんのかよ!!! いつもいつも、仕事仕事つてただ逃げてるだけだろ。母さんの葬式の時だつて、仕事を言い訳にして来なかつたじゃないか。そんなんあんたが、親のことなんて言つんじゃねえーよ! パシンツ!!!

渴いた音が俺の頬から聞こえた。

秋

「かつ要さん。」

俺の頬をうつたのは、要さんの温かいてだつた。
要さんの頬には、涙がたまつていた。

要

「秋俊さん。いへりなんでも、そんなこと言つてはいけません。旦

那様は、いつもあなたのこと、奥様のことを考えておいでです。けれどして、仕事を言い訳にして逃げてなんかいません。」

父

「要くん。もういい。さがりなさい。」

要

「旦那様」

父

「確かに秋俊の言つとおり、仕事を言い訳にして逃げていたのかもしない。私は信じたくなかった。命の死を、だから、仕事に没頭することで命の死を忘れようとしていた。だから、必要以上にまわりに厳しくしていた。」

そういつた父さんの目から、涙が流れ落ちた。

父

「すまなかつたな。秋俊。つらい思いをさせた。霧枝くん。今回のことは、わすれよう。また頼むよ。」

秋

「父さん。」

秘

「はっはい。」

父

「学校に遅刻するだ。早く行きなさい。要くんもな。」

要

「あっ、はい。」

秋

「「めん。父さん。なにも知らないずに、あんなこと言つて。」

俺がそういうと父さんは、優しい笑顔をくれた。

それは、初めて見た父さんの、心からの笑顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0608a/>

School Frends

2011年1月12日14時26分発行